●日向国分寺の再検討２

奈良文化財研究所のデータベース「全国遺跡報告総覧」の
https://sitereports.nabunken.go.jp/ja/search/item/8029?all=%E6%97%A5%E5%90%91%E5%9B%BD%E5%88%86%E5%AF%BA%E8%B7%A1
からダウンロードできる報告書、2009 年刊『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書 56：日向国分寺跡－主要伽藍及び寺域の確認調査―』によって再検討する。

１；伽藍と方位

日向国分寺跡の本格的な考古学調査は、1995（平成 7 年）の第一次調査から、2006（平成 18）年・2007（平成 19）年の第 12 次調査にまでわたる調査の結果、寺域と伽藍域、さらにはいくつかの建物を確認した。（「日向国分寺跡推定寺域及び伽藍復元図」を参照）

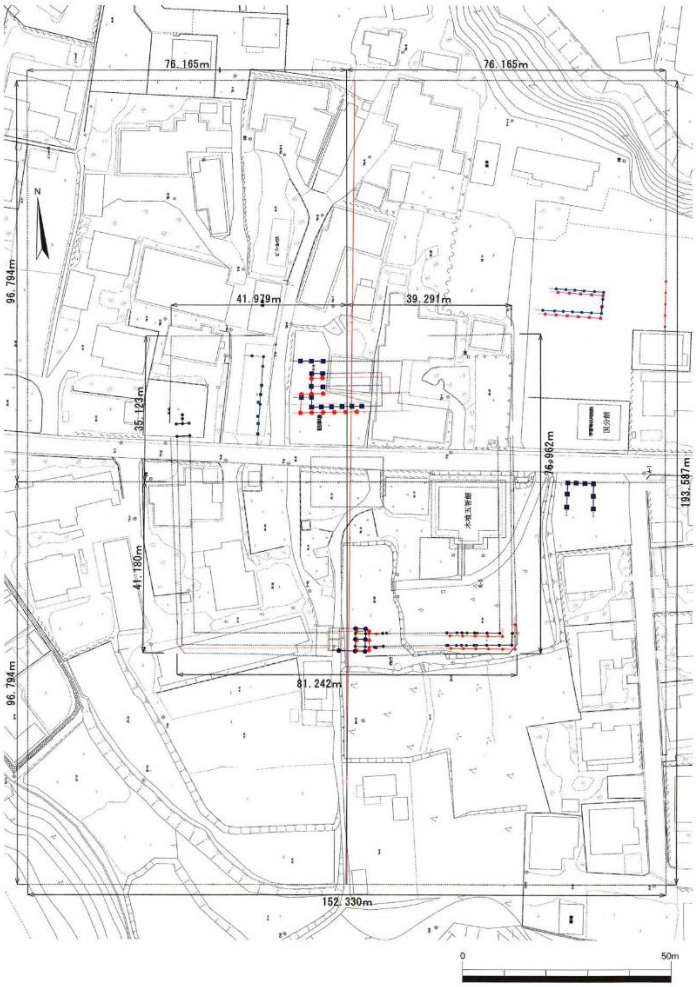

Fig.176　日向国分寺跡推定寺域及び伽藍復元図(1/1,000)

●大官大寺式伽藍を復元

確認された遺構は、伽藍東南隅の掘立柱式回廊とそれにそった区画溝、伽藍西部の西門遺構、伽藍北西部隅で東西から南北に折れる区画溝、さらに伽藍北部の講堂と考えられた掘立柱東西建物とその西側の性格不明の掘立柱南北建物、そして中門跡。さらには伽藍東北隅の外には食堂と判断された掘立柱東西建物、そして伽藍東、回廊上の東門と考えられるところのすぐ東の南側には性格不明な大型掘立柱南北建物が確認された。

これらの確認された遺構をもとに伽藍を復元し、これに未発見の金堂や塔の位置をいくつかの遺構に基づいて推定位置を入れて作ったのが、「日向国分寺跡推定寺域及び伽藍復元図」である。

これによると寺域は、東西 152.33m、南北 193.587m と復元され、柱穴列や塀で囲まれていたと考えられている。

そしてこの中にある伽藍だが、東西 81m 幅の区画溝と南北 76〜77m 幅の区画溝で囲まれる中に、主要伽藍がある。

この主要伽藍だが、北側には講堂と考えられる掘立柱建物があり、その南に金堂があり、その南に中門があり、中門から伸びる掘立柱式回廊が、中門から東西に、さらに東と西の隅で北に延長され、講堂と金堂との間に東西に設けられた門までこの回廊が続いていた。そしてその北側の講堂の東西と北側は柵列で区切られ、さらに金堂の東南隅に塔があったと考えられている。

要するにこの伽藍は、大官大寺式を基本とし、回廊だけが金堂に取りつかない形式だということである。

●大官大寺式復元の誤りー真実は回廊内に塔・金堂がならぶ古式伽藍

だが遺構の詳細を検討してみると、このような復元は間違ったものだとわかる。この復元は、「国分寺は大官大寺式か東大寺式伽藍のはず」という思い込みで発掘し、出ていた遺構を素直にとらえようとせず、この想定に合わせて解釈しようとしたために誤った結果であったと思う。

実際の日向国分寺は、もっと古い 7 世紀前半台の伽藍形式、講堂に取りついた回廊の中に金堂と塔が東西に並ぶ形式を基本にしたものだったのだ。

次に各遺構詳細を記し検討し、どこが間違いか記しておこう。

最初に中門遺構。次に回廊遺構。さらに西門遺構。ここには問題はない。

問題は、講堂遺構。これは僧房だ。

したがって金堂と想定された位置にあるのが講堂。

最後に塔。発掘で確認された柱抜き穴は塔ではない。

a：中門

Fig. 12　KBJ5A区平面図(1/80)

(「日向国分寺中門遺構」を参照)

中門は南面する八脚門で、３期にわたる。

Ⅰ期は桁行 2.lm(7 尺)・梁行 1.5m(5 尺)の 2 間で 3.Om(10 尺)で、梁行が回廊と同じ規模なので、回廊の一部を門にしたような形状をなす。

Ⅱ期は、桁行 2.lm(7 尺)・梁行 2.4m(8 尺)の 2 間で 4.8m(16 尺)と南北に拡大。

Ⅲ期はさらに拡大され一部しか確認できなかったが、桁行 3 間・梁行 2 間の八脚門と推定した場合、第 3 期中門は東西 9.9m。南北 4.8m の八脚門になる。

そしてⅠ・Ⅱ期は共に回廊と同じく掘立柱式だが、Ⅲ期のみ柱穴の中に柱の痕跡が確認できず、穴底に川原石や瓦片が確認されたので、礎石建物と判断されている。

また中門には基壇の痕跡も見られないので、地山上に直接柱を建てた構造と考えられている。

b：回廊

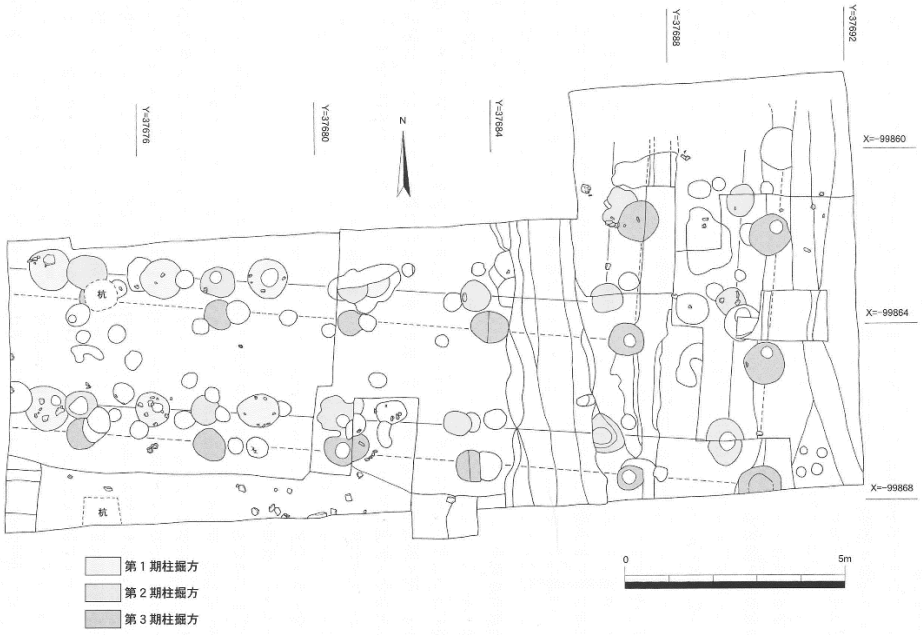

Fig. 41　KBJ4A区平面図(1/100)

（「日向国分寺回廊遺構」を参照）

回廊は中門と同じく３期にわたるもので、すべて掘立柱式の単廊である。

Ⅰ期は桁行 2,4m(8 尺)、梁行 3.Om(10 尺)。

Ⅱ期は桁行・梁行ともに 3.Om(10 尺)。

Ⅲ期も桁行・梁行ともに 3.Om(10 尺)。

また第 1 期柱掘方内の埋土に瓦片等が混入しているものもあることから、回廊は創建期には所在しておらず、金堂などの主要建物よりやや遅れて建立されたと予想される。

またⅢ期の回廊だけが、Ⅰ・Ⅱ期の回廊より、中門を中心に時計回りに 1.5°　程振れていることが確認されている。

c：西門　　（「日向国分寺西門遺構」を参照）

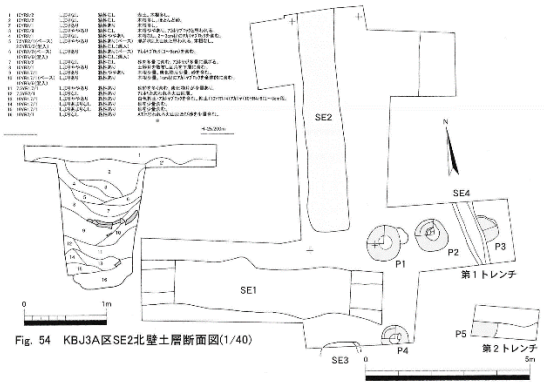

Fig. 54　KBJ3A区SE2北壁土層断面図(1/40)

Fig. 55　KBJ3A区平面図(1/100)

西門は南北１間、東西２間の一辺 3m の四脚門である。

この門の東側には何らの施設が接続しておらず、門の南側には回廊が接続し、門の北側は柵列が接続していたと考えられている。

d：講堂⇒小子房付の僧房とするべし！

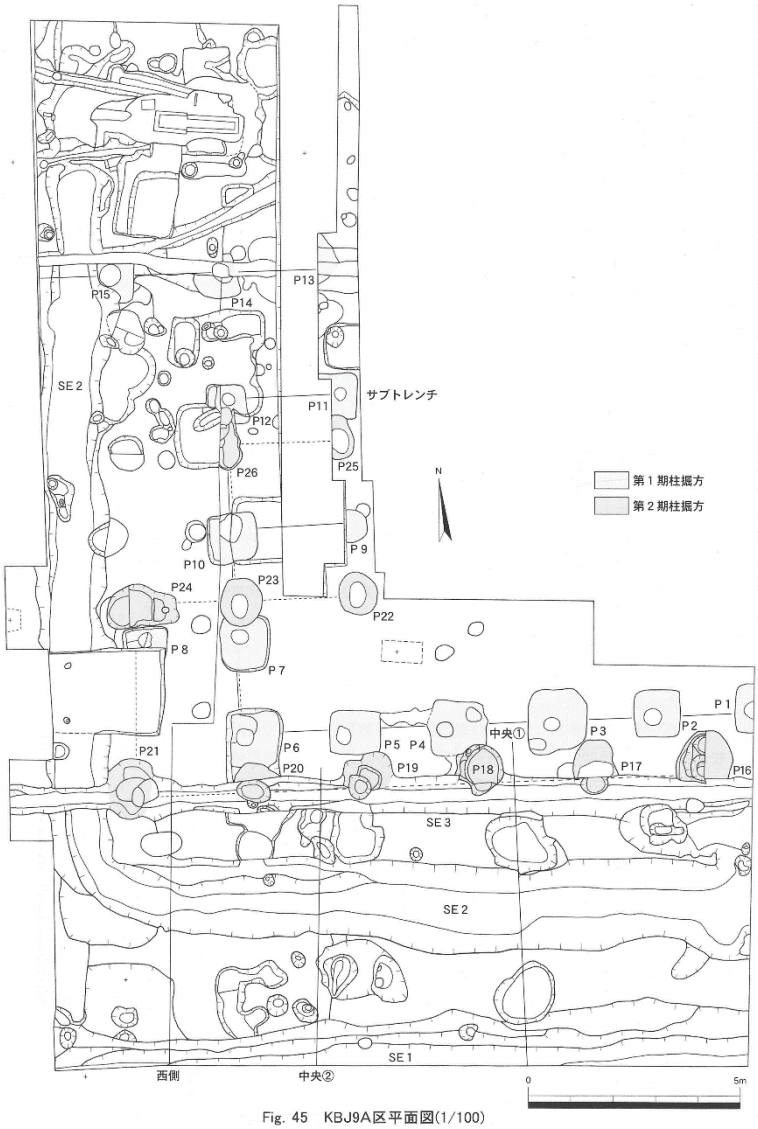

Fig. 45　KBJ9A区平面図(1/100)

（「日向国分寺講堂遺構」を参照）

講堂は、２期存在する。どちらも掘立柱式建物。

Ⅰ期は、桁行７間梁行２間で、北側に 10.5 尺の広庇がつく。

柱間８尺なので東西 16.8m。南北 7.95m。

Ⅱ期は、桁行９間梁行１間で、北側に 12 尺の隅欠庇がつく。

柱間９尺なので、東西 24.3m。南北 7.8m。

なんとこの「講堂」と判断された建物は、庇を除いた建物本体部分は、Ⅰ期では梁行２間で桁行７間の東西に長い建物。そしてⅡ期でも、梁行１間で桁行９間の東西に長い建物なのだ。

この報告書は「講堂」としたが、このような形状の建物は通常、僧房か僧房に付属した、寺僧の従者たちの宿所である小子房と見られる。なぜなら僧房とは、一間ないし二間の広さの小さな個室化した空間が一人の僧に割り当てられた形式をとるのが通常なので、とても長細い形式になるからだ。

おそらく北側の「庇」とされたところが従者のための「小子房」で南側の建物が「僧房」であろう。

報告書がこの建物を「講堂」としたのは、そもそもこの伽藍は大官大寺式か東大寺式と想定して発掘しており、この建物が確認されたすぐ南が金堂と考えていたためである。

こうした大官大寺式とか東大寺式とかの思い込みを排除すれば、この建物は小子房を伴った僧房と判断すべきだ。

またもう一つの想定が可能だ。

このⅡ期にわたる掘立柱建物は従者の宿所である「小子房」と判断すると、その西側に確認できた大型の南北棟掘立柱式建物こそ僧坊であり、「小子房」の東西に同規模の僧房が存在したと判断することも可能である。

e：金堂⇒講堂とするべし！

（「日向国分寺跡推定寺域及び伽藍復元図」を参照）

したがってこの僧房の南に存在し「金堂」と想定された建物こそ「講堂」なのだ。

つまりこの寺院の伽藍中軸線に乗る建物は、南から、中門ー講堂ー僧房なのだ。そしてこの回廊と講堂で囲まれた地域が東西に横長の形態をとっていることを考慮すれば、この寺院の伽藍形式は、金堂や塔が、この「講堂」と東・西・南の回廊で囲まれた地帯に置かれたもので、観世音寺式や法起寺式・法隆寺式と呼ばれる、講堂と中門に回廊が取りつき、この回廊の中に塔と金堂が置かれる形式のいずれかに似た形式が採用されていたものと思われる。

しかしこの報告書では、一応これらの観世音寺式や法起寺式・法隆寺式の伽藍も想定はしているが、これは否定された。その理由は、中門と講堂との間の区画内に金堂があったと想定することはできないとしているからだ。それはあちこちトレンチを入れて掘ってみたが、想定金堂の南西や南東の地区で、基壇やその下の掘り込み地業すら確認されていないからだ。

Fig.177　日向国分寺跡中心伽藍遺構図(1/500)

（「日向国分寺跡遺構図」参照）

だがそう考えるのならば、塔のみ、この区画の東南側にあったとする想定自体もおかしなことになる。

f：塔⇒憧竿支柱とすべし！　（「日向国分寺塔跡土坑」を参照）

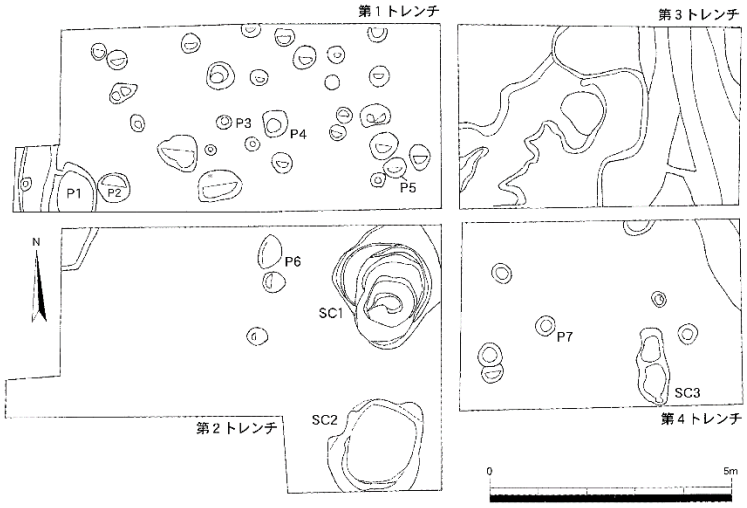

Fig. 68　KBJ1B区第1～4トレンチ平面図(1/100)

塔は「金堂」の東南か西南にあったはずと想定してトレンチを入れて発掘した二つの地域からも、基壇といわず掘り込み地業跡と言わず、なんらめぼしい遺構は出てこなかった。

出てきたのは、「金堂」の東南の地区の南北に並ぶ円形の柱掘方二つだけ。

北側の 1 号土坑(SC l)は長軸 2.6m・短軸 2.2m。深さ 1.4m、2 号土坑(SC 2)は長軸 2.lm・短軸 1.65m・深さ 1.4m を測る。二つの土坑の距離はおよそ 3m で、2 号土坑からは柱を掘り抜いた際の掘方と推定されるラインも確認されている。

また、1 号土坑の壁面は北側が階段状に掘られているのに対し、2 号土坑は全面ほぼ垂直に掘削されている。このことから、 1 号土坑は柱を抜き取る際に北側を大きく掘削し、柱を北側に倒したと考えられる

また、各土坑内から出土じた古瓦は横縄瓦片と無文瓦片が最も多く、縦縄瓦片がこれらの 2 分の 1 程度しか出土しておらず、第 3 期中門や回廊跡の柱掘方、また、伽藍区画溝内から出上した遺物と同様の遺物構成をしていることから、国分寺創建期の建物ではない可能性が高いと推定される。

つまり第Ⅲ期中門と第Ⅲ期回廊、そしてこの二つの円形柱掘方はともに、この寺院の創建期ではなく、あとの方の時期に作られたということを意味している。

-

この柱掘方が出た場所が、第 1・2 期南東回廊の東西柱筋から約 45°　時計回りに振つた地点に位置することを理由として、報告書では、この地に塔があったと断定し、そこに基壇も掘り込み地業がないことを説明するために、この塔は特殊な作り方をしたと推定した。

すなわち、塔は心柱を掘立柱で建て、四天柱については周囲から柱掘方が検出されていないことから、掘立柱の心柱を建てた後、心柱を囲うように基壇を築き、その基壇状に礎石が配されたか、掘立柱なのかは不明であるが、そのような構造であつたと考えるしかない、としているのだ。

これはあまりに強弁と言わざるをえない。

そもそもこれも報告書に記されたことなのだが、この円形の掘方二つは、憧竿支柱の柱掘方の可能性も示唆されていた。

つまり金堂の前庭に大きな幡を立てるための竿 (憧竿) の支柱を建てるための穴という理解だ。

この円形掘方は南北に連なって掘られており、直径は 2.0m 強、現表土からの深さも約 2.0m という巨大なものだ。

本報告書がこの二つの巨大な穴が憧竿支柱だとする見解を否定した根拠は、一つは幡の支柱を南北に並べた例はなく、通常は東西に並べるものだということ。そして幡の支柱としては 2.0m は巨大すぎるというもの。

だが南北に並んだ類例を知らないからと否定するのは勇み足。

また幡の支柱が南北に並んだ例を知らないという考えは、その北側の伽藍中軸線上にあ

る建物を金堂と想定したからだ。
　そうではなく、この寺院の金堂は、講堂と回廊に囲まれた地区の西側にあり、しかもそれが南北棟で東を正面とした金堂だったと考えてみよう。つまり観世音寺式の金堂と同じ形式である。
　そうであるなら、この二つの柱穴は、金堂の正面に並んで建つ形になるわけだ。
　そして穴の直径が大きいのは報告書も記しているが、巨大な柱を抜いた跡と考えることができる。巨大な掘立柱をそのまま抜くには柱を傾けて抜くしかないからだ。

　こう考えてくれば、この遺構を塔の遺構と考えるよりは、憧竿支柱と考えることができる。そしてむしろこの理解の方が合理的理解だと思う。
　また報告書は全く記していないのだが、南北に並ぶ二つの柱掘方を塔心柱を抜いた跡と考えると、塔は一度建設した後、塔本体を解体して塔心柱を抜いて、再度少し南に建て直したという意味になる。
　こんな無駄な大変なことをするだろうか。
　報告書の図面を見ると（「日向国分寺跡遺構図」）、二つの柱穴の北側の柱穴を中心として塔の位置は復元されている。つまり南側の柱穴は無視されているのだ。つまりこの二つの柱穴を塔心柱の跡と解釈することには無理がある証拠である。

　それよりもこれは塔が一旦解体されて他の場所に移されたあとで、金堂前庭と化したこの場所を飾るために二本の巨大な憧竿支柱が建てられたと考えるべきではなかろうか。つまり日向国分寺は伽藍が改造されたのだ。

●日向国分寺伽藍の変遷
　この伽藍は一度作り替えられたと考えるべきだ。
a：創建時
　つまり創建時には、講堂と中門の間の空間に、塔と金堂とが東西に相対する形式の伽藍であった。
　金堂の位置と向きは、先の二本の憧竿支柱の位置から考えて、この空間の西側に南北棟で東を正面にした形であった。
　そしてこの際には回廊はまだなく、おそらく中門から東西に延びた柵列とこれに沿った区画溝が、ぐるっと北に回って伽藍全体を囲む形式であったと思われる。

b：増改築時
　その後、何らかの折に、講堂より南の地域の柵列は撤去されて、中門に取りつく掘立柱式単廊の回廊が敷設され、その際に中門も大きく改造された。
　そしてこの回廊はその後一度ほぼ同じ位置で建て替えられ、この際に中門はさらに大き

なものに建て替えられた。

c：伽藍改造時

　その後、いつのころか伽藍全体が改造されたのではないか。

　つまりこの講堂と回廊との間の空間にあった塔は解体除去され、塔はこの回廊で囲まれた地区の外に新たに作られたのではないか。

　この塔が除去された跡地に大きな幡を立てるための竿（憧竿）の支柱を建てるための穴が二つ並べて掘られ、そこに大きな憧竿が金堂の正面に二本建てられた。

　そして同時に回廊と中門も作り替えられ、中門は掘立柱式から礎石建物に作り替えられ、回廊も建て替えられたが、この際回廊は前の二期よりも少し南に 1.5 度振れた位置で建て替えられた。

　ということではないだろうか。

　そしてこの伽藍改造の時期は、聖武詔によって、七重塔が作られた時期であったと考える。

　つまり従来の五重塔を七重に改造するには回廊内の空間が小さすぎるので、塔を解体して、回廊の外に新たに七重塔として建設した。

　このような伽藍変遷を辿ったと考えることが可能である。

　さらに回廊と講堂で囲まれた地帯に金堂と塔の基壇や掘り込み地業の跡すら見られないのは、この地域が後世に畑地として利用され、表土をかなり削り取られた結果なのではないだろうか。実際にトレンチを見ると、多数の穴が見られ、これは近世における畑作に伴う穴と理解され、さらに何筋かの溝も確認できたが、これも近世における畑作の水路と理解されている。

　この日向国分寺は、国分寺廃絶後は集落や畑地として再利用され、その際に表土がかなり剥ぎ取られ、下にあった遺構も、深い穴を除いて破壊されたと想定できるのだ。

　なおこの伽藍の方位は、Ⅰ期・Ⅱ期回廊の時代は東偏 3 度、Ⅲ期回廊の時代は東偏 5 度程度である。

　つまりこの寺院は、九州王朝がその宮殿や寺院の方位を東偏に取っていた時期、つまり 6 世紀末以前に創建され、その後増改築されたときも、この伽藍中軸線の方位は基本的に維持されたままであったと思われるのだ。

　次に項を改めて、出土瓦からみた伽藍変遷とその時期を検討しよう。

2021 年 5 月 5 日